

彩りキノコ

清水鱗造

灰皿町

「蛇腹畑線」蛙地…別貯…外墨…蛾々…蛇腹畑…牛有留…便井…蛭泉…幕足…花忙

仕事で必要な資料を読んでいると、ときどき気になることが書いてあるものにぶつかることがある。無機的なものの題材から、意外に有機的なものにそのまま延長できるような題材。最近では、たとえば「入口と出口について」という文章の内容を簡略化して写してみると次のような内容だった。図が多数入った文書である。

「すべての切片には入口と出口がある」ということが、金太郎飴を切る形でわかりやすく図解されて説明されている。つまり、飴の切断面の柄に入口と出口のある城が描かれていて、薄く切っていくとすべての切片に入口と出口がそれぞれにあるという絵柄だ。

これを立体に延長してみた図もあった。このスライス将球の形に歪めて糊づけすれば、入口と出口がある球の群ができあがる。この球を星に宇宙に浮かべると、すべての星に出口入口の穴がある。だけれどもこの出口入口は必ず表面をゆっくり移動して近づいていくという法則がある。そして出口入口が一致してしまうと、完結してしまう。出口と入口が遠くにあつて、入口に新鮮な気持ちで入っていくくらい出口が離れているといいのだが、入口のすぐそばに出口があるとなにか汚いと思う。クラゲは口から食べ物を入れて、また口から排泄するらしい。ここで、なにかとても細い透明な筋が絡む大きな

クラゲの絵が配置されている。

出口と入口が一緒になってしまふまでの時間経過が、短い一生の物語なのかもしれない、と結論めいた文章も書いてある。

旭雄^{あきお}は、電車の窓にゆっくりと動いていく植物を見ていた。蛙が、ヒガンバナをわしわしと食らう絵。車窓にヒガンバナが流れるのを見ると、そんな物語ふうな映像が頭に浮かんだ。本当は蛙が食べるのはいろいろな虫類だろう。花はまず食べないだろうが、蛙の食べ物になる虫の汁がかかっていたらそのにおいて間違えて食べるかもしれない。

鉄道線路の脇には、秋にはヒガンバナがしばらく多量に咲いている地域があつて数分間楽しめる。蛇腹畑線の二両編成の車両から毎日見ている、さかんに赤くなりまたくすんでいく畑の移り行きの入口と出口間の時間。毎日のヒガンバナの群落が通りすぎるときに見える赤い入口と赤が消える間の数分間。

蛙はヒガンバナを口に収めると、一センチの小さなフオークを畑に落として這つていつてしまう。手でフオークを使って口に運んでいたからね、と想像しながらハツカ飴を口にコロコロ転がしている。蛙の口からは、ヒガンバナの紅い汁が筋になって流れている。

もう一つの動く絵が頭に浮かぶ。

「秋ですね」と、窓枠に肘を立てて見ている二体のセルロイドの人形に塗られた白い色のかさぶたが粉になって、剥げてかぐわしい空気にさらさらと流れる。人形を窓枠に載せて、こちらを向かせたのだ。「車中で人形をカバンから出すのはまずいですよ。どんな諜報員が見ているかわかりません」と車内を通り過ぎる車掌が言いそうだ。大人で人形遊びをしていると、通報されなまでもいったん判断を停止したようなうつろな目で見られることがあるのだ。

その白い人形は、一秒に二コマほど見える映像。たくさん静止画を重ねていき、カクカクと小刻みに動く。剥がれて空気に流れた塗料の粉は一つ一つ蝶になり、対面式の座席の間をチラチラ飛びはじめ。一体の女性の人形には濃い口紅が引いてある。その周辺を蝶の群れが通り過ぎる。

するとセクシーな猫が、対座する白い人形の横の空いている席に座った。足を組むところが生々しく見える。男女の白い人形の 하나가、

「第一夢想の上書きをしないでください、猫ちゃん」

と言った。その間にも、細かい蝶が向かい合う座席の空間に群れている。

「いいえ、続いて第二夢想の段階ですよ」と猫は割り込むように言う。そして、ありきたりの「猫ヒゲに弾ける火」の絵を出すために、鼻のあたりを手でくしゅくしゅこすつ

て静電気を起こしていた。

小さい稲妻が猫の顔のあたりの宙に簡単に湧いて、火花に触れそうな蝶の群れは避けて通路のほうにちらちら移動していく。

「猫権利を、ただ主張しているだけですよ」と通路を通りかかった犬の車掌さんが、白人形たちに言う。「猫にだって夢想を上書きする権利はあるんです。もちろん、私たち犬にも犬の権利があります」と権利問題の話を延ばした。そのとき、第一夢想は収縮するのだろうか、通路の天井に並んでいる電灯が点滅して夢想の変化の兆しを表した。夢想空間の中では、鉄道に勤める動物は犬が多い。まだ電灯は点滅している状態なので、急いで言うと蛇腹畑駅の駅長さんも雑種犬なのだ。夢想空間を上書きした「蛇腹畑線」の空間に戻れば、雑種犬の覇地璃はちりは駅舎に迷い込んできた野良犬だ。地元の人たちはマスコットとして飼い、駅長さんと任命し親しみのある駅を演出している。

蛇腹畑線の蛙地から四つ目の駅が、この線の名前にもなっている蛇腹畑である。駅舎に鉄道の帽子をかぶった犬がつかがれていて、それが駅長さん。駅を通過する乗客はみんな犬が好きで、立ち止まって駅長さんを撫でていく人もいる。二面編成の電車の到着が一時間以上ないときに、駅周辺の草取りなどのあいだに駅員が駅長さんを近くの林に散歩に連れていく。もちろん犬の駅長さんは評判になり、ネットワークの動画などでと